

雛祭のうつりかわり



山田 徳兵衛

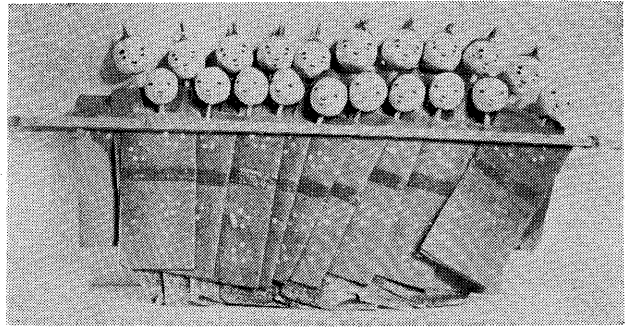
今では、節句といえは三月の雛祭、五月の端午の節句、七月の七夕ぐらいしか祝わなくなつたが、もとは正月七日、九月九日、そのほか節分、お彼岸、八十八夜なども節句として祝つていたのである。もともと季節の変わり目には人を犯す悪気があつて、それを避けなければ

この二つが結びついて、いつしか形代やひとがたを流すことをやめ、家にまつるようになって後世の人形・雛祭が生まれたのであらうといわれている。

病氣などの災いにかかると、昔の人は信じていたので、神を迎えて神の力で祓ってもらおうとしたのである。その節々の七種粥^{ななくがゆ}、草餅^{くさもち}、粽^{ちまき}などの食品を神に供え、人もたべた。また、紙を切つて神の形代^{かたしろ}をつくりそれを使つて祓い、祭がすむとその形代は水に流し神送りした。なお、人の代わりのひとがたを作つて体をなでて、自分のけがれや災を負わせた人形^{ひとがた}を流すことも行なわれていた。

昔は旧暦なので、三月は桃の花のさくころなので桃の節句ともよんでいたのである。そして、いろいろな行事が生まれてその日を祝つてきた。地方によってはこの節句に紙雛を作つて川へ流す行事が行なわれた。今でも鳥取市の流し雛は、郷土玩具の名品として残っている。これは今日のような雛祭のはじまる前の雛祭の名残りだと考へてよいだらう。ところで、それでは今日の雛祭の形式はいつごろから始められたのであらうか。

今では雛といえは、三月節句の人形になつてしまつた



鳥 取 の 流 し 雛

が、古く平安時代は「ひいな」とは、小さく可愛らしく作った男女の人形を称したようである。平安時代末期、宮畔祭みやのほとりというのが行なわれていた。これはわが家の不吉をはらい、幸運を祈る行事であった、祭神は高御

魂たまひのみ神をはじめ男女六柱の神であつて、この神々を人形に作った。三条殿の東面の妻戸の左右の柱の下に笹をたてて、それへ男女の人形をつるした。この人形も「ひいな」とよび、台盤所の女房がこしらえた。いろいろな染め絹を用いてつくり、男の人形には束帯させたりした。雛祭が生まれたことについては、この宮畔祭の人形の影

響もまた存するかもしれない。しかし、「ひいな」とは

ふだんの日にもて遊ぶ人形の称でもあつた。平安時代の

物語類、例えば栄花物語の御裳着の巻・はつ花、さらに

源氏物語の紅葉賀・総角すべかく・若紫の巻などを読むと、雛遊ひなあそ

びの語がみえており、それは今日も女の子のする、人形

を用いるまま、ごとのような遊びであつた。この雛遊びは

後世も貴族のあいだで行なわれていた。それはやや形式

化して（三月節句と関係なく）雛や雛道具を娘たちへ贈

物にすることが行なわれていたようである。ところで形

代または人形ひなごを流さないで、家にまつるようになった

が、それが江戸時代にはいると、雛とその遊び道具を飾

ることがはじめられた。その遊びの人形がいつごろ飾ら

れる人形に変わっていったか、はっきりしないが、書物

の上に、今日のような形式の雛祭のことが現われるのは

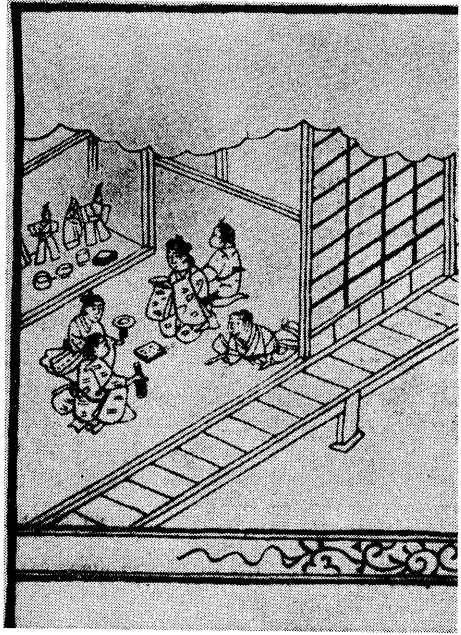
案外おそく、江戸時代も寛永年間（一六二四〜一六四

三）からである。

雛祭の古い文献は、天皇の側近に奉仕する女房たちが

書き継いだ日記「御湯殿の上の日記」をはじめ「時慶卿ときよしあき

記」俳書「花花草草」「俳諧初学抄」「毛吹草」などの書にある。とくに、応仁の乱がようやくくじまったころの



元禄ごろの雛祭 俳諧童子教所載

入れらしいところに雛を飾ってある。江戸初期では一般家庭の雛祭は調度も少なく、貝殻に食物をもって供するといったものもあった。元禄のころまで雛祭の三月節句の人形は紙雛（立雛）と内裏雛（だまり）だけであり、それを飾る雛道具も、膳部や菓子などを供える程度であった。享保（一七一六〜一七三四）ごろから、雛祭も年を追うて賑やかになっていく。内裏雛や紙雛に添えて、大張子一対、這子（こ）それから裸人形を飾るようになり、そのほかに、さまざまなる人形もつくられて飾ることになった。

また、女乗物とか行器（はか食物をいれる容器）、簞

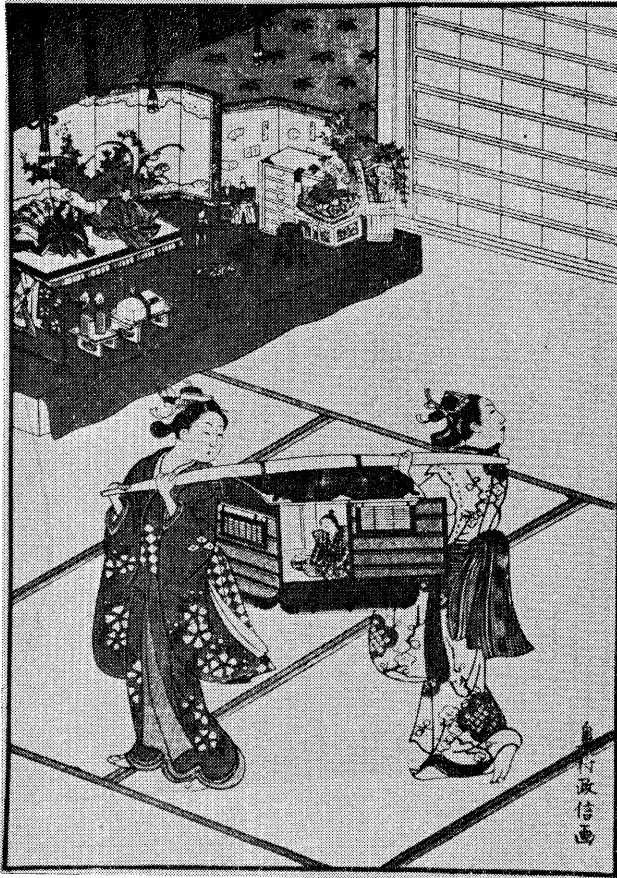
「御湯殿の上の日記」文明十一年（一四七九）閏九月九日の条に、
二の宮の御かたの、ひひなやいてきて、御やわたりとて、御さか月まるる

とあるので、ふだんの日の雛祭がすでに上流階級ではじまっていたことは確かである。

こうして江戸初期の雛祭は簡素なやり方で「俳諧童子教」に描かれた図をみると、紙雛を二対ならべ、茶碗のようなものが三つおいてあり、雛段はなく、床の間か押

筥、長持などと嫁入りに持参する諸道具の模型も飾るようになり、雛段というものを設けるようになった。しかし、農漁村の家などでは、きれを用いた内裏雛などではなく土製の、雛や人形を飾るのが普通であった。これは、今日も郷土玩具としてのこっている。

雛祭が流行しはじめると、どのようないきさつからか、三月節句は女の子の祭の日になってしまった。これは、もともと人形は女の子のものであったからである。前述のように、雛祭は女子の出生とは関係がなかつ



「雛の使い」(約200年前) 絵本小倉錦所載

他のいろいろの人形、ならびに雛道具を並べるようなきまりになってきた。ただし、関西では雛段のかわりに御殿ごてんを用いることが多かった。かくして、雛祭は江戸時代の太平を背景に、年々盛んになり、しばしば幕府から大形の雛を禁じられたり、ぜいたくな道具類を禁じられる儉約令が出されるほど華美になったが、人形や道具類の製作は年々進歩した。

大体、雛も江戸時代は、今より大型のものが喜ばれた。内裏

たのが、女子の初節句を祝う行事となって、雛、雛道具の種類はますます多くなった。上流ではその贈答の使者をまた雛にさせるという趣向で「雛の使い」といって、吊台に雛その他の贈物をのせて呈することが流行した。それから次第に娘の嫁入りに雛をもたせてやるようになり、嫁入り後の初節句に雛祭を行なう風習も生まれ、女

の節句として広く行なわれるに至った。

雛の種類がふえ、お道具もいろいろ飾るようになる

と、節句前には各地の町村で賑やかに雛市がたつようになった。

江戸末期には雛段に飾る人形もほぼ今のような形式にかたまった。上段に雛屏風、内裏雛を飾り、下の方へそ



今日の雛段飾り

長い年月、雛祭が国民的行事として続いてきたことは、日本人の人心への愛情の深さを示すものであろうが、一般の日本人形が、各国の人心の中でも優れているのは、永年行なわれた雛祭の行事の影響によることも多いであろう。

杯などを飾ることがほぼ定まった。近年は、住宅その他の関係で、ケース入りなどの小さなきめこみ細工の雛人形も喜ばれている。

の示唆をうけ、江戸で作りだされたもので、写実的で近代好みの容姿が歓迎され、のちに東西ともに流行し、明治以後今日の雛は、だいたい古今雛の系統によっている。雛祭も、明治維新後、文明開化が唱えられ、旧習打破のあおりで一時衰えたが、民間習俗の強い力は、明治二十年ごろから大いに復興した。当今では、まず内裏雛（男雛は向かって左、女雛は右）、それに三人官女、五人雛、隨身、衛士、調度は屏風・ぼんぼり・桜（右）と橋・重箱・御膳・お三方・菱台・高杯などを飾ることがほぼ定まった。

雛もつきつき新型が売り出された。それらには寛永雛、享保雛、次郎左衛門雛、有職雛、古今雛などという名がのこっているが、寛永雛は遺品のうちで最古のもので、これをさらに精巧に様式化したのが享保雛である。京都で製作され、丸顔で引目・かぎ鼻の古風な顔立ちの次郎左衛門雛、これは今もきめこみ雛にその風をのこしている。有職雛は有職故実によった写実的な特殊の雛で、京都の公家衆のあいだで行なわれた。古今雛はこの有職雛